

## 『宇治拾遺物語』所収和歌の本文流伝

——「年を経て頭の雪は積もれども」歌の検討——

小野 のぞみ

〈一〉

『宇治拾遺物語』には、全百九十七話中に和歌を載せる説話が十五話あり、十八首の和歌（うち一首は連歌）が収められている。即ち第一〇、四一、五一話には、それぞれ二首ずつの和歌が載っており、四〇、四二、四三、八一、九三、一一一、一四六、一四七、一四八、一四九、一五〇、一八二話に、一首ずつ載る。本論文では、第四〇話から第四三話、第一四六話から第一五〇話を和歌説話群と呼ぶことにする。少なくともこの部分は、「和歌」を以って意図的に編集され重視された説話であることは間違いない。

本論文において、その和歌説話群中の話ではないが、第一一一話「歌詠みて罪を許さる事」に載る「年を経て」の和歌を取り上げる。この和歌の本文を、『宇治拾遺物語』万治二年林和泉掾版行本を底本とし、『宇治拾遺物語』諸本および他の文献諸本に載るものについて対校し、検討する（本論文の末尾に和歌を収める管見に入つたすべての諸本の一覧を付す）ことにより、『宇治拾遺物語』編者の和歌説話の中心的題材である和歌の採り上げ方を明らかにしたい。そうすることによって、『宇治拾遺物語』編者の説話再構成の目指したところの一端が解明できると考えるからである。

まず、第一一一話「歌詠みて罪を許さる事」の本文を示す。（引用は小

林保治氏・増古和子氏校注・訳『宇治拾遺物語』新編日本古典文学全集 50 平成八年七月刊による）

今は昔、大隅守なる人、国の政をしたため行ひ給ふあひだ、郡司のしどけなかりければ、「召しにやりて戒めん」といひて、先々か様にしどけなき事ありけるには、罪に任せて重く軽く戒むる事ありければ、一度にあらざ、たびたびしどけなき事あれば、重く戒めんとて召すなりけり。「ここに召して率て参りたり」と、人の申しければ、先々するやうに、し伏せて、尻、頭にのぼりゐたる人、答を設けて、打つべき人設けて、先に人二人引き張りて出で来たるを見れば、頭は黒髪も混らず、いと白く、年老いたり。

見るに、打ぜん事いとほしく覚えければ、何事につけてかこれを許さんと思ふに、事つくべき事なし。過ちどもを片はしより問ふに、ただ老を商家にていらへをる。いかにしてこれを許さんと思ひて、「おのれはいみじき盗人かな。歌は詠みてんや」といへば、「はかばかしからず候へども、詠み候ひなん」と申しければ、「さらば仕れ」といはれて、程もなく、わななき声にて打ち出す。

年を経て頭の雪はつもれどもしもと見るにぞ身は冷えにける  
といひければ、いみじうあはれがりて、感じて許しけり。人はいかにも情はあるべし。

この話に収められている「年を経て」の歌は、初先学に指摘がある通り、『古本説話集』第四四話、『今昔物語集』巻第二四第五話、『十訓抄』巻第一〇第三九話、『拾遺抄』巻第一〇雑下、『拾遺和歌集』巻第九雑下、『俊頼髓脳』、『奥義抄』序、『尊円歌書』古今序注』にも載る。

『古本説話集』に載る話は『宇治拾遺物語』と同文的同話であり——『古本説話集』は『宇治拾遺物語』と同じ先行文献による兄弟関係にあるとさ

れている。<sup>(2)</sup>——和歌以降の部分が、

としをへてかしらにゆきハつもれともしもとミるにそ身はひえにける

とよみたりければ、かミいみしうかむし、あハれかりて、ゆるしてやりてけり。

と、『宇治拾遺物語』に見える詠歌を勧める評語がない。『古本説話集』と『宇治拾遺物語』とが参照した先行文献には、評語は添えられていたのだろうか。『古本説話集』で削ったのか、それとも『宇治拾遺物語』で加えたのであろうか。

『今昔物語集』に載る話もほぼ同話であるが、末尾の評語がやや異なる。

然レバ、云フ甲斐無キ下臈ノ田舎人ノ中ニモ、此ク歌詠ム者モ有ル也ケリ。努々不可蔑、トナム語り伝ヘタルトヤ。

(本文は新編日本文学全集による)

と、舎人であっても侮ってはいけない、という評語になっている。

『十訓抄』では、いわゆる歌徳を説く話の中で、この和歌が紹介されている。但し、その和歌は『宇治拾遺物語』に載る和歌とは上句に大きな異文がある。そしてその異文は『拾遺和歌集』、『拾遺抄』と共通する。『拾遺和歌集』は、

大隈守さくらじまの忠信がくにに侍りける時、こほりのつかさにかしらしろきおきな侍りけるをめしかむがへんとし侍りける

時、おきなよみ侍りける

おいはてて雪の山をばいただけどしもと見るにぞ身はひえにける

という詞書と歌形で収め、「このうたによりてゆるされ侍りにけり」という左注がある。ここから、『宇治拾遺物語』では名前の示されていない大隈守が「桜島忠信」であると分かる。『拾遺抄』の詞書も、『拾遺和歌集』の詞

書と同内容である。但し、左注はない。『俊頼髓脳』では、「密通・盗物な

ど破廉恥罪が露見した時に、罪人の詠んだ歌の例」としてこの和歌が紹介されている。『奥義抄』では、序において和歌の効用を様々説明する中で、

「わたくしのいかりをもなだむ」ものとしてこの和歌が紹介されている。

『尊円歌書(古今序注)』は、『古今和歌集』仮名序の、「たけきものゆの心をもなぐさむるはうたなり」の具体例の一つとしてこの和歌を挙げている。八戸市立図書館本『古今和歌集見聞』は、冒頭部が『尊円序注』と概ね重なり、共通の親本が想定されているものであり、『尊円歌書(古今序注)』とほぼ同文である。

なお、『宇治拾遺物語』諸本間では和歌に異文はない。ただ、『三國名勝図会』所引の『宇治拾遺物語』では、第二・三句が「雪の山をばいただけど」となっている。

『宇治拾遺物語』三國

年をへて雪の山をばいただけど霜と見るにぞ身はひへにける

これは『拾遺和歌集』などに載るのと同じ歌形である。『三國名勝図会』は天保一四年(一八四三)の刊で、時代が下る。『拾遺和歌集』の和歌のこ

とばと混同したものであろう。

まず『宇治拾遺物語』と『古本説話集』および『今昔物語集』に載るこの和歌の異同をしてみる。

第二句「頭の雪は」が『古本説話集』および『今昔物語集』諸本では「頭」に「雪は」となっている。第四・五句「霜と見るにぞ」「身は冷えにける」の「にぞ」「ける」が、『今昔物語集』の多くの本で、「こそ」「けれ」となっている。

## 『宇治拾遺物語』

万治 としをへてかしらの雪・はつもれどもしもとみるにぞ身はひえにける

## 『古本説話集』

梅沢 としをへてかしらにゆきハともれともしもとみるにぞ身はひえにける

## 『今昔物語集』

実践 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレドモシモトミルコソミハヒヘニケレ

カリ トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレドモシモトミルコソミハヒヘニケレ

内閣 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレドモシモトミルコソミハヒヘニケレ

丹鶴 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレトモシモトミルコソミハヒヘニケレ

東大 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレドモシモトミルコソミハヒヘニケレ

筑甲 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレトモシモトミルコソミハヒヘニケレ

筑乙 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレトモシモトミルコソミハヒヘニケレ

史籍 トシヲヘテかしらに雪・ハつもれともしもとみるにそみハひえにけれ

詳引 老いはて、かしらに雪、をいたゞげどしもと見るにそ身はひえにけれ

東洋 トシヲヘケカシラニ雪・ハツモレトモシモトミルコソミハヒヘニケレ

内乙 トシヲヘケカシラニ雪・ハツモレトモシモトミルコソミハヒヘニケレ

内甲 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレドモシモトミルコソミハヒヘニケレ

内丙 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレトモシモトミルコソミハヒヘニケレ

彰考 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレトモシモトミルコソミハヒヘニケレ

蓬左 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレトモシモトミルコソミハヒヘニケレ

陽明 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレトモシモトミルコソミハヒヘニケレ

本居 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレトモシモトミルコソミハヒヘニケレ

大和 トシヲヘテカシラニ雪・ハツモレトモシモトミルコソミハヒヘニケレ

第四句の「ニソ」「コソ」異同は、平仮名書写でも片仮名書写でも似るこ

とがあり、誤読から生じた異文であろう。第五句の「けれ」は、第四句の

「こそ」に合わせて改定したものと見てよい。第四句の本来の形は「にぞ」

であったのだろう。下旬については、後述の通り上句に大きな異文のある『拾遺和歌集』等でも、「霜と見るにぞ身は冷えにける」とある。『今昔物語集』の異文は『今昔物語集』の編者の改変と考えられる。

第二句は、「頭の雪」というまとまりで白髪のことを示すことになる。一方「頭に」の場合、「雪」の積もる場所を表すことになり、「雪」という語のみで白髪を表すことになる。いずれにせよ白髪を指していることには変わりがない。

これは小さな異文ではあるが、極めて重大な意味を持つ。

『宇治拾遺物語』と『古本説話集』とは直接の引用関係にはなく、前述の通り、散逸したある先行文献から別々に引用したという兄弟関係であると考えられており、その共通の母胎として、散逸『宇治大納言物語』が想定されている。『宇治拾遺物語』と『古本説話集』とで全体で二十二話が共通する。その内、和歌の載る説話は九話である。それらの共通話は、細部には小異はあるが、たしかにいずれも同文的同話である。

しかるに、この「年を経て」の和歌は、『古本説話集』においては『今昔物語集』と同じ「頭に雪は」という本文なのである。この事実から、『古本説話集』と『今昔物語集』の拠った先行文献に載っていた歌は、

年を経て頭に雪は積もれども霜と見るにぞ身は冷えにける

という形であったと考えざるを得ない。つまり、「頭の雪は」と改めたのは『宇治拾遺物語』編者の独自の判断によると考えられるのである。「頭の雪」も「頭に雪」も同じように年老いてしまったことを表現したものであるが、「頭の雪」の方が、多く歌に詠まれてきた。『宇治拾遺物語』編者は、和歌で多く用いられる一般的な表現を用いているということがいえる。

〈三〉

この話が『古本説話集』『今昔物語集』以外の文献に載る場合について見てみる。

下句にはさほど大きな差異はない。下句の「しも」とは「霜」と「答」の掛詞であり、この和歌の工夫であり、最も重要な部分である。本文を変えるわけにいかない部分なのである。

この和歌における最も大きな本文の差異は、上句にある。

第一・二・三句「年を経て頭の雪は積もれども」が、『十訓抄』諸本、『拾遺抄』諸本、『拾遺和歌集』諸本、『俊頼随脳』諸本（類従本を除く）、『奥義抄』諸本において「老い果てて雪の山をば頂けど」となっているのである。――『俊頼随脳』類従本では第二句が「雪の山をも」となっている。

また、『拾遺和歌抄』静嘉本、『拾遺和歌集』佐賀県多久市立図書館蔵本では「雪の髪をば」となっている。また、『拾遺和歌集』季吟本では、「雪の山をハいたゞけと」の右側に「宇治拾遺物語ニハかしらに雪ハとあり」と注記がある。――

『拾遺和歌集』京都

おいはてて雪の山をばいただけども見ると見るにぞ身はひえにける

『拾遺和歌集』に代表される「老い果てて雪の山をば頂けど」の歌形の表現要素を見ると、①老化②雪の「山・頂く（＝白髪）」の、二つが挙げられる。「頂く」は「山」との縁語であり、第二句と第三句は、対応関係にある。また、『宇治拾遺物語』に代表される「年を経て頭の雪は積もれども」の歌形の表現要素を見ると、①時間の経過（＝老化）②頭の雪・積もる（＝白髪）の二つが挙げられる。「積もる」は「年」の縁語であり、第一句と第三句は、対応関係にある。それぞれの形には、同じ要素が盛り込まれてお

り、それぞれに必然性のある形であることが分かる。ただし、『拾遺和歌集』にはあって、『宇治拾遺物語』にない要素に「山」がある。

『拾遺和歌集』の諸本が「老い果てて……」とするから、その歌形がこの歌の本来の形であったのかもしれない。しかし、『宇治拾遺物語』諸本と、『今昔物語集』諸本はすべて「年を経て……」とするから、この二形は早い段階から分化していたと見てよい。『宇治拾遺物語』や『古本説話集』、『今昔物語集』が参照した先行文献ですでに「年を経て……」の形になっていたと考えてよい。

なぜこのような本文変化が生じたのであろうか。

一つ考えられるのは、類似の和歌と混同したということである。白髪を雪に例えることは古くから行われてきたのであって、それを詠み込んだ歌も多い。たとえば、『家経集』に、

於西宮惜落花和歌

としをへてかしのゆきはつもれどもをしむにはなもとまらざりけり

（『家経集』六四）

という当面問題の歌と同じ上句の歌が載り、『後拾遺和歌集』一一一五番歌から一一一七番歌にかけては、次のように、『宇治拾遺物語』、『古本説話集』、『今昔物語集』に載る形の和歌と同じ言葉が用いられた歌が連続して収められている。

上東門院長家民部卿三条のいへにわたらせ給たりけるころ、にはかにみゆきありてちかき人人のいへめさされければ、まかるべきところなきよしそうせさせ侍けり、その御かへりにうたをよみてまゐらせよとおほせられければ、ゆきのふるひよみてまゐらせける

伊勢大輔

としつむるかしのゆきはおほぞらのひかりにあたるけふぞうれしき

冷泉院東宮と申しけるととき女のいしみにみづくみたるかたゑにか  
きたるをよめとおほせられければ 源しげゆき

としをへてすめるいづみにかげみればみづはぐむまでおいぞしにける  
春かしらしろき人のゐたるところをゑにかけけるを 花山院御製  
はるくれどきえせぬものはとしをへてかしらにつもるゆきにぞ有り  
ける

このような和歌の表現を誤って混同した、という可能性もないではな  
らう。

尤も、誤謬ではなくて、故意に本文を変えたとも考えられる。「老い果て  
て」よりは「年を経て」の方が多くの和歌に詠まれている形であるからで  
ある。それに、「年を経て」が時間の経過を語る感慨のみであるのに対して、  
「老い果てて」は感情を吐露するところのある物言いである。森山茂氏は、  
「和歌の徳を大ならしめるためには、功徳を受ける者が貧困賤卑の底に沈  
むものであればあるだけ、よかつた」といわれる。歌徳を強調するために  
はあからさまな物言いの方がよいかもしれない。だが、説話作者はそうい  
つたあからさまな表現を避けた可能性もある。また、「老い」ということば  
は、冒頭に引いたように、話の文中に「頭は黒髪も混らず、いと白く、年  
老いたり」「ただ老を高家にていらへを」とあり、語の重複を避けたこと  
も十分に考えられる。「老い果てて」という歌形であると、「何事につけて  
かこれを許さんと思ふに、事つくべき事なし」「ただ老を高家にていらへを  
る」とあるのに、ことばの上から、やはり「老い」を理由に答えたのにも  
かかわらず、それを許してしまったことになる。そのことばの矛盾を避け  
たかつたのかもしれない。

また、白髪を表現するのに、雪の「山」である必然性が見出せなかつた  
ために、「老い果てて雪の山をばいただけ」という言い方を避けたのかも

しれない。ただ、詠歌の場では、「山」と詠むことに意味があつたかもしれ  
ない。薩摩の桜島の名前の由来は、一説には、この説話の大隈守桜島忠信  
である。実際にこの和歌を詠んだ時には、その場から雪を頂いた桜島の山  
が見え、「山」と詠む必然性があつた、と見ることもできよう。

上句は、『尊円歌書（古今序注）』と、『尊円歌書（古今序注）』と共  
通の親本が想定されている八戸市立図書館本『古今和歌集見聞』とでは、

『尊円歌書（古今序注）』尊円

としよりて雪の山をばいた、けとしもとみるにそ身ハひえにける

である。『拾遺和歌集』と『宇治拾遺物語』とに載る本文を折衷し、少々変  
形した形である。この「年寄りて雪の山をば頂けど」という本文は、何に  
よつたのであろうか。『尊円歌書（古今序注）』の尊円は、永仁六（一二九  
八）年から延文元（一三五六）年の人である。この頃には、こういった本  
文を持つ資料が存在したのであろうか。それとも、『拾遺和歌集』等に載る  
本文と『宇治拾遺物語』等に載る本文とが混態を成したのであろうか。こ  
れが『拾遺和歌集』等に載る本文から『宇治拾遺物語』等に載る本文への  
変化の過程を示す本文なのであろうか。『尊円歌書（古今序注）』本文中に  
は、「十一首」などという『拾遺和歌集』等に見られない記述も含むので、  
別系統の伝承の可能性も考えられる。

最後に、下の句の異文についても見ておく。『拾遺和歌抄』類従本は、

『拾遺抄』類従

老はて、雪の山をばいた、けと霜とみるまで身はひえにける

と、「霜とみるまで」とあり、「まで」の右側に「にそ集」とある。書写の  
所拠本で「まで」となっていて、『拾遺和歌集』と校合して「にそ」と注記  
したものである。また、『拾遺和歌集』歴成本では、

『拾遺和歌集』歴成

老はて、雪の山をはいたゞけとしもと見る身そ身はひえにける  
と、第四句が「しもと見る身そ」とあるが、「身」が見せ消ちにされ、「に」と訂正されている。『俊頼隨腦』頭昭本、久遠本では、

『俊頼隨腦』頭昭

おひはて、雪の山を×いたゞけと霜とみるにそみはしみにける  
と、第五句「冷えにける」が「しみにける」となっている。頭昭本には「いひへ」という異文注記もある。この二本は第二句「雪の山をはい」についても「雪の山を×」（頭昭本は右側に「イは」と注記）とあり、書写の関係の近い本であることがわかる。

末句の「しみにける」は、「凍ってしまふことだ」という程の意味である。「冷えにける」、「しみにける」のどちらでも歌意は通る。

『十訓抄』彰考

老はて、雪の山をはいたゞけとしもとみるにそ身はひへにけり

『奥義抄』書乙

老はて、雪の山をはいたゞけとしもと見るにそみはひえにけり

『十訓抄』彰考本、静嘉本、公文本、武庫本、祐徳本、書乙本では、「冷えにける」が「冷えにけり」と言い切りの形になっている。『奥義抄』書乙本では、その「り」を見せ消ちにして「る」と注記している。「しもと見るにぞ」と「ぞ」との係り結びで、文末は「ける」の方が妥当である。

〈四〉

『宇治拾遺物語』第一一話「歌詠みて罪を許さるる事」は、年老いた郡司が和歌を詠んで罪を許してもらう話であるが、その和歌には所載文献の間で大きな異文があった。上句の「年を経て頭の雪は積もれども」が『拾

遺和歌集』諸本、『俊頼隨腦』諸本（類従本を除く）、『奥義抄』諸本で「老い果てて雪の山をば頂けど」となっている。その理由は、一つには誤謬が考えられる。いま一つには、あからさまな表現を避けるため、あるいは説話本文との重複を避けるために、故意に変えたとも考えられる。『尊円歌書（古今序注）』では、「年寄りて雪の山をば頂けど」とあり、別系統の伝承の可能性も考えられる。歌徳を説き詠歌を勉める目的で好んで伝えられるうちに、多くの異伝が生じたのである。<sup>1)</sup>

また、第二句「頭の雪は」が、『古本説話集』および『今昔物語集』諸本では「頭に雪は」となっており、この異文は極めて重大な意味を持っている。同じように年老いてしまったことの表現ではあるが、「頭の雪」が、多く和歌に詠まれており、『宇治拾遺物語』編者は、和歌でさほど多くは用いられない表現を、多く用いられる分かりやすい一般的な表現に変えていることがあったといえる。

『宇治拾遺物語』に載る和歌は、諸伝本の間でさほど大きな異文がない。同じ説話を載せる『今昔物語集』『古本説話集』や歌集など他の文献にまで広げても、ほぼ同じことが言える。しかし、中には、本論文に見たように、和歌の質にまで関わる重大な異文の見られるものもある。一々の歌について所載和歌の本文の差異を確認することは、各伝本の、そして各説話集の、書写や改変の在り方の一端を追及する手続きとして、欠かせないであろう。

〔注〕

1 『宇治拾遺物語』に載る和歌十八首の本文掲げる。括弧内は、説話番号および題目である（新編日本古典文学全集による）。

川口久雄氏校訂『梅沢本古本説話集』(岩波文庫 昭和四〇年四月) 解題、高橋眞

- ① 去年見しに色もかはらず咲きにけり花こそものは思はざりけれ  
(一〇 秦兼久、通俊卿の許に向ひて悪口の事)
- ② 春来てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ  
(一〇 秦兼久、通俊卿の許に向ひて悪口の事)
- ③ 悪しきだになきはわりなき世間によきを取られてわれいかにせん  
(四〇 木こり歌の事)
- ④ 匂ひきや都の花は東路にちちのかへしの風のつけしは  
(四一 伯の母の事)
- ⑤ 吹き返すこちのかへしは身にしみき都の花のしるべと思ふに  
(四一 伯の母の事)
- ⑥ 朽にける長柄の橋の橋柱法のためにも渡しつるかな  
(四二 同人仏事の事)
- ⑦ 昔より阿弥陀ほとけのちかひにて煮ゆるものをばすくふとぞ知る  
(四三 藤六の事)
- ⑧ 人知れず身はいそげども年を経てたき逢坂の関  
(五一 一条摂政歌の事)
- ⑨ あづま路に行きかふ人にあらぬ身はいつかは越えん逢坂の関  
(五一 一条摂政歌の事)
- ⑩ 死ぬばかり嘆きにこそは嘆しか生きて問ふべき身にしあらねば  
(八一 大ニ条殿に小式部内侍、歌詠みかけ奉る事)
- ⑪ われが身は竹の林にあらねどもさが衣を脱ぎかくるかな  
(九三 播磨守為家の侍佐多の事)
- ⑫ 年を経て頭の雪はつもれどもしもと見るにぞ身は冷えにける  
(一一一 歌詠みて罪を許さるる事)
- ⑬ 悔しくぞ後に逢はんと契りける今日をかぎりといはましものを  
(一四六 季直少将歌の事)
- ⑭ めぐりくる春々ごとく桜花いくたびちりき人に問はばや  
(一四七 木こり小童隠題歌の事)
- ⑮ はだかなる我が身にかかる白雪はうちふるへども消えせざりけり  
(一四八 高忠の侍、歌詠む事)
- ⑯ 都へと思ふにつけて悲しきは帰らぬ人のあればなりけり  
(一四九 貫之歌の事)
- ⑰ あなでりや虫のしや尻に火のつきて小玉とも見えわたるかな  
(一五〇 東人、歌詠む事)
- ⑱ うへわらは大童子にも劣りたり／祇園の御会を待つばかりなり  
(一八二 仲胤僧都、連歌の事)

- 氏『古本説話集』と諸説話集との説話伝承の関係(『言語と文芸』51 昭和三七七年七月)、野口博久氏『古本説話集の成立と宇治拾遺物語』(『言語と文芸』51 昭和三十七年七月)等が、『古本説話集』は『宇治拾遺物語』と同一先行文献に拠ったとする。
  - 3 引用は、新編国歌大観による。以下、特に断らない場合の和歌の引用も同様。
  - 4 新編日本古典文学全集頭注による。
  - 5 藤原家経(正歴三(九九二))〜永承七(一〇五八)の家集。
  - 6 歌徳説話について、森山茂氏は「さらに、貧困賤卑の底に沈むものが歌によつて救われたとするところは、歌道を勧める上でも都合がよいということになる。」と言われる。(『歌徳説話論序説』『尾道短期大学紀要』昭和四九年一月)
  - 7 天保一四年刊の『三國名勝図会』大隅國大隅郡櫻島の巻の「島名諸説」に、この説を紹介している。
  - 8 他にも、時代は下るが、荻生徂徠の隨筆『南留別志』に、「かしらにはおどろの雪をいたゞけどしもと見るにぞ身はひえにける。といふ歌は、笞杖の罪の事をいへり。笞杖は、荊楚につくるゆゑ、おどろといへるなるべし。」とあり、この和歌の上の句は「かしらにはおどろのゆきをいたゞけど」としている。
- 「年を経て」の歌を載せる諸作品の諸伝本の内、国文学研究資料館収蔵マイクログ資料等で調査し得たのは、以下の諸本である。
- 『宇治拾遺物語』万治二年林和泉掾版行本(流布本)。(筑波大学マイクログ)、陽明文庫本(陽明叢書)(296)、伊達本(古典文庫複製、書陵部本(笠間影印叢刊複製)、龍岡文庫本(龍岡文庫善本叢刊複製)、九州大学文学部五冊本(別22)、蓬左文庫本(107-29)、今治市河野美術館五冊本(114・258) Ⅱ甲、今治市河野美術館蔵四冊本(函号114・259) Ⅱ乙、無刊記古活字本(岩波文庫活字本)、三國名勝図会所引
  - 『古本説話集』梅沢文庫本(古典資料類従6)
  - 『今昔物語集』実践女子大学二十六冊本(新編日本古典文学全集)、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館本(旧三井文庫本)(新日本古典文学大系、内閣文庫本)(林家旧蔵本)(日本古典文学大系)、丹鶴叢書、東大田中頼康氏旧蔵本(致証今昔物語集)、筑波大学二十八冊本(ル12083) Ⅱ甲、筑波大学十一行本(ル120210) Ⅱ乙、史籍集覽、十訓抄詳解所引、東洋文庫二十八冊本、内閣文庫十七冊本(210-107) Ⅱ乙、内閣文庫二十八冊本(210-106) Ⅱ甲、内閣文庫二十八冊本(210-108) Ⅱ丙、彰考館文庫小山田与清写本三十二冊(丑20)、蓬左文庫二十八冊本(107-54)、陽明文庫十八冊本(35-276-1)、東大本居文庫十四冊本(本居総195、国文675)、大和文華二十八冊(3202~3229)
  - 『拾遺抄』島根大学図書館写一冊本(911.1353・SH99)、宮内庁書陵部本(405・11)
  - Ⅱ甲、宮内庁書陵部享保七年写一冊本(谷・305) Ⅱ乙、静嘉堂文庫所蔵貞

和三年奥書本、歴史博物館高松宮一冊本(2・222・6)、神宮文庫一冊(348)、群書類従本(底本：寛治二年書写本)

『拾遺和歌集』底本：京都大学附属図書館中院本(中院VI 93)(新編国歌大観)、藤原定家筆(汲古書院)、伝一条為忠・世尊寺行忠筆本(愛媛大学古典叢刊)、北野本、藤原定家書写本系統(底本：京都大学図書館中院通茂臨模定家自筆本)

・(拾遺和歌集の研究)、異本第一系統(底本：宮内庁書陵部所蔵堀河宰相具世筆本)・(拾遺和歌集の研究)※異文注記は佐賀県多久市立図書館本、異本第二系統(北野天満宮本)・(拾遺和歌集の研究)、浄辨本後撰集拾遺集(尊経閣藏刊)、正保四年開版八代集原本(有朋堂文庫)、国立国会図書館正保四年刊本『八代集』(東洋文庫)、大本の古版(日本古典全集)、群馬県立女子大学図書館本、三國名勝図会所引、八代集抄(北村季吟古註釈集成)、筑波大学二十一代集版本(106・30)、静嘉堂文庫本、大阪市立大学附属図書館(森文庫)(911・135・S110)、東京大学総合図書館二冊本(A00・S992)、東大文学研究室江戶中期写一帖(中古116・2)、東大文学研究室『八代集』(C1346)、盛岡市中央公民館二冊本(382)Ⅱ甲、盛岡市中央公民館二冊本(360)Ⅱ丙、盛岡市中央公民館二冊本(361)Ⅱ丁、杵築市立図書館二冊本(和53)、日本大学総合図書館南

北朝写本(為家卿筆)、多和文庫二冊本(10・2)、大山寺本(第九号)、内閣文庫本(特91・3)、陽明文庫本(122・歌1・1)、歴史博物館高松宮本(C599)

Ⅱ甲、歴史民族博物館高松宮本(C600)Ⅱ乙、歴史民族博物館高松宮本(C632)

Ⅱ丙、歴史民族博物館高松宮本(C713)Ⅱ丁、歴史民族博物館高松宮本(C784)

Ⅱ戊、歴史民族博物館高松宮『十一代集』(C661)Ⅱ己、福井県立図書館松平

文庫『八代集』十四冊本(C2789)、桑名市立文化美術館(秋山文庫)『三代集』

三冊本(70)、桑名市立文化美術館(秋山文庫)『八代集』本(C3757)、松平公

益会十四冊『八代集』本(又)、松平公益会『八代集』本(又)、逸翁美術館『八

代集』十五帖本(143)、今治市河野美術館『十一代集』本(101・683)、大

阪女子大学附属図書館『八代集』本(911.13H)、増抄翻刻

『十訓抄』宮内庁書陵部片仮名本(63842)、(古典文庫)、京都大学本(校本十訓抄)、

国会図書館本(古典資料)、名古屋大学本(延宝六写)、(校本十訓抄)、天理大

学本(校本十訓抄)、吉田幸一氏本(平仮名本)、(校本十訓抄)、彰考館本(第

三類)・(校本十訓抄)、異本十訓抄(底本：東京大学国文学研究室蔵本)・(校本

十訓抄)、静嘉堂蔵本(21279)・(校本十訓抄)、国立公文書館内閣文庫本(2671

2)・(校本十訓抄)、内閣文庫三冊本(203・96)、武庫川女子大学本(校本十訓

抄)、祐徳稲荷神社本(校本十訓抄)、祐徳稲荷神社(中川文庫)、近世初中期写

三冊本(別6)、大和文華(鈴鹿文庫)写三冊(6・5000・5002)、富山大学(ハ

ン)文庫、本(2112・4)、益田勝美氏三冊本、東洋文庫三軸本、名古屋大学小

林文庫二冊本(E308)Ⅱ甲、名古屋大学小林文庫三冊本(E309)Ⅱ乙、名古屋

大学小林文庫三冊本(E311)Ⅱ丙、兵庫県立篠山鳳鳴高校図書館青山文庫三冊

本(9134・3)、永井義憲氏本、尊経閣文庫三冊本(351・7(3))、東大国文

学研究室江戶写三冊本(中世334・1)、賀茂別雷神社(三手文庫)三冊本(國

史・貳・84)、山口県立山口図書館三冊本(160)、元禄六年刊八冊本、享保六

年刊五冊本、普通の完本(国民文庫)、十訓抄詳解(明治書院)、絵入版本

『俊頼朝勅』国立国会図書館本、頼昭本翻刻、内閣文庫本(歌学文庫二)、内閣文庫

『俊頼抄』写二冊本(202・18)Ⅱ甲、内閣文庫『俊頼抄』写二冊本(202・1

9)Ⅱ乙、久遠宮家旧蔵本『俊頼無名抄』(翻刻)、関西大学図書館『俊頼抄』本

(翻刻)、彰考館文庫『唯独自見抄』三冊本(己19・07527~9)Ⅱ甲、彰考

館『俊頼口伝』二冊本(己21・07591~92)Ⅱ乙、中田光子氏二冊本、尊経

閣文庫『俊頼口傳』二冊本(354・2)、国文研初雁文庫五冊本(C2188)Ⅱ甲、

国文研初雁文庫一冊(C2217)Ⅱ乙、刈谷市立刈谷図書館『俊頼抄』二冊本(18

35)Ⅱ甲、刈谷市立刈谷図書館五冊本(2261)Ⅱ乙、東大文学研究室『俊頼

口伝』二冊本(中古112・3)、酒田市立光丘図書館『俊頼抄』二冊本(和歌6)、

続々群書類従本(翻刻)『俊頼口伝集』(黒川本を底本に清水浜臣校本で校訂)、

筑波大学本(ル205・112)、マーカー三井二冊本(87・0083)

『奥義抄』久曾神昇蔵九条家旧蔵本(日本歌学大系)、国立歴史民族博物館本、金刀

比羅宮図書館正徳五年写二冊本(1361)、内閣文庫本(201・752)Ⅱ甲、内閣

文庫三冊本(201・753)Ⅱ乙、京都大学図書館吉沢文庫本(YK911・201F)、

宮内庁書陵部三冊本(155・98)、大東急記念文庫本(磯駒帖)、慶安五年刊八

冊本、国文研『扶桑拾葉集』本、市立図書館『扶桑拾葉集』本(56・118

- 1)、陽明文庫『扶桑拾葉集』本(近732)、宮内庁書陵部『扶桑拾葉集』本(1

51・154)Ⅱ乙、宮内庁書陵部『扶桑拾葉集』本(554・17)Ⅱ丙、白百合女

子大学国文学研究室『扶桑拾葉集』本(918・F96・1)、盛岡市中央公民館『扶

桑拾葉集』本(753)、神宮文庫蔵『扶桑拾葉集』本(1495)内

『尊円歌書(古今序注)』曼殊院本

『古今和歌集見聞』八戸市立図書館本(国文学研究資料館紀要)

(抄) のぞみ 筑波大学大学院 人文社会科学研究所 学生